

中学校

平成 15 年 度

教育研究員研究報告書

総合的な学習の時間

東京都教職員研修センター

A 分科会

区市町村名	学校名	氏名
豊島区	千登世橋中学校	多久 知明
北区	北 中学校	山崎 正剛
板橋区	赤塚第二中学校	近藤 江美
足立区	第十六中学校	三輪 政継
国分寺市	第一中学校	平田 学

B 分科会

区市町村名	学校名	氏名
中央区	日本橋中学校	井原 顕章
江東区	第二亀戸中学校	八木 秀明
世田谷区	新星中学校	富田 優子
狛江市	狛江第四中学校	木崎 智子
多摩市	落合中学校	田崎 陽一

世話人 副世話人

担当 東京都教職員研修センター研究部研究課 統括指導主事 伊東 哲

目 次

主題設定の理由	2
研究の概要	3
1 仮説の設定	3
2 研究内容・方法	3
3 研究の構想図	4
追究活動の段階における学習形態・学習活動の工夫	5
1 研究を進めるにあたって	5
<表1> 追究活動の段階における学習活動一覧	6
2 <図1> 追究活動の段階における学習の流れ	8
<図2> 中間発表会の効果	8
3 【事例】学習活動の組み合わせ方	8
追究活動の段階における効果的な評価の在り方	10
1 研究を進めるにあたって	10
<表1> 評価方法一覧表	11
2 自己評価について	12
3 相互評価について	13
実践事例	14
1 A中学校における実践事例	14
2 B中学校における実践事例	18
成果と課題	23

研究主題

生徒一人一人が意欲的に取り組める総合的な学習の時間の工夫
- 追究活動における効果的な指導と評価の在り方 -

主題設定の理由

完全学校週5日制の下、「ゆとり」の中で特色ある教育を展開し、幼児・児童・生徒に[生きる力]を育成することを基本的なねらいとした総合的な学習の時間が創設されてから1年が過ぎた。総合的な学習の時間では、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」や、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」がねらいとされている。

このようなのねらいをふまえ、各中学校では、それぞれの地域や学校、生徒の実態等に応じ、横断的・総合的な学習など創意工夫を生かした教育活動を行うように努力している。しかしながら、中学校における総合的な学習の時間では、今後解決しなければならない課題が山積していると言っても過言ではない。

例えば、「課題の設定」・「課題の追究」・「課題の検証」などそれぞれの段階での生徒への支援や、問題解決的な学習における指導と評価の一体化など、これまでの講義中心の一斉授業とは違った様々な課題を解決していかなければならない。

こうした新たな課題に対応するために教師は、課題の設定の仕方から検証までの段階における指導方法についての理解を深めることが大切である。特に生徒は、課題を設定するまでが難しいといわれている。さらに課題の設定を乗り越えた生徒は、課題の追究の場面において興味・関心が持続せず、課題に対する意欲が低下することも少なくない。そこで教師は、生徒の学習活動の中心となる課題の設定やその先の追究の場面の指導と評価の在り方を創意工夫し、生徒の学習意欲を高めることがきわめて重要である。

生徒が意欲をもって調べ学習や体験活動に取り組むためにはどのような工夫が必要であるか、また、教師は生徒の様々な学習活動に対してどのように評価すればよいかなど、今後の総合的な学習の時間の充実は、その学習活動における生徒の能力や態度の向上だけにとどまらず、各教科等の学習活動にも大きく反映されるものである。言い換えれば、生徒が主体的に問題解決的な学習に取り組むことができるようになれば、その後の学習活動に対する意欲や態度も必然的に変化し、いわゆる[生きる力]の育成へとつながるものである。

そこで、本研究では、課題の設定の場面における先行研究を土台に、課題の追究の場面に焦点をあて、生徒一人一人が意欲的に取り組める「総合的な学習の時間」を展開するために、効果的な追究活動と評価の在り方について研究を進めることとした。

研究の概要

1 仮説の設定

本研究を進めるに当たり、次のように仮説を設定した。

総合的な学習の時間において、課題追究の段階で学習形態・学習活動を工夫するとともに、学習意欲を引き出せるような評価を行えば、生徒一人一人が主体的に学習に取り組めるであろう。

2 研究の内容・方法

(1) 分科会の設置

本研究では、問題解決学習における「課題の設定」・「課題の追究」・「課題の検証」という学習段階の中で、特に追究活動に注目し、「追究活動の段階における学習形態・学習活動の工夫」と「追究活動の段階における効果的な評価の在り方」の2つの分科会を設置し、主題に沿って下記の内容について、研究・実践することにした。

A分科会（追究活動の段階における学習形態・学習活動の工夫）

本分科会では、追究活動の段階における学習形態・学習活動の工夫をする上で、学習形態を「一斉・グループ・個人」の3つに分類した。また、学習活動を体験学習やゲストティーチャーなど外部の人材活用等に基づく展開などに分類し、研究を進めることにした。

ア 学習形態・学習活動の工夫をする上で、追究活動の段階における様々な学習活動を整理し、その長所や留意点を挙げた。また、実際に指導計画を立てる上で利用しやすいよう、各学習活動を追究活動の中の情報収集、情報処理、考察の各段階に分類・整理した。

イ 効果的な追究活動の組み合わせ方を実際の授業を通して検証し、具体例としてまとめた。

B分科会（追究活動の段階における効果的な評価の在り方）

本分科会では、追究活動の段階における学習活動は様々であり、その目的は各学校が目指す生徒像や生徒の実態に応じて変化することから、各学習活動における効果的な評価の方法を中心に研究を進めることにした。

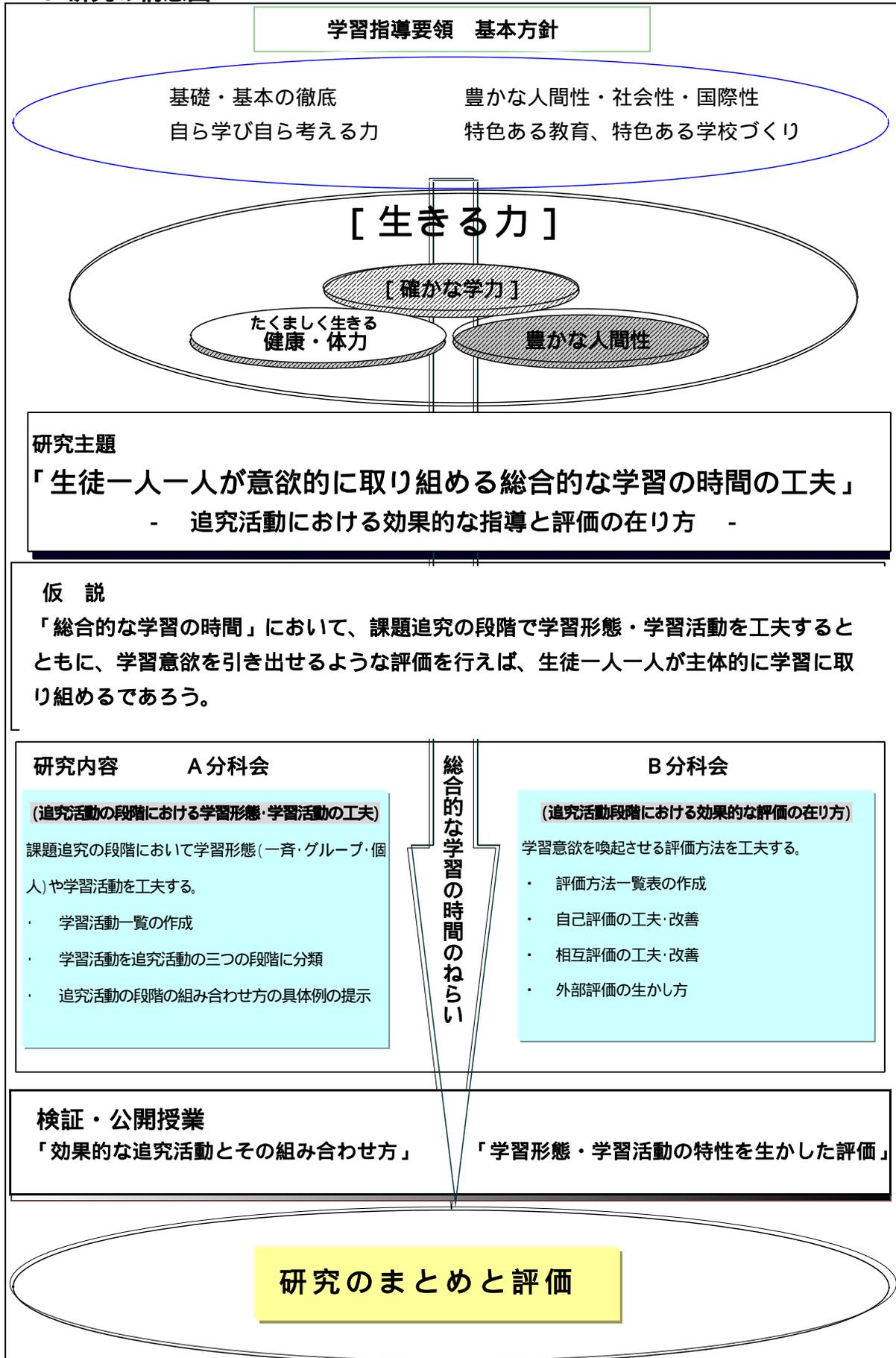
ア 総合的な学習の時間の追究活動において生徒の学習意欲を喚起させる評価活動として、自己評価・相互評価に重点を置いた。

イ また、総合的な学習の時間の追究活動で活用される学習活動は様々であるため、その評価方法については各学校が目指す生徒像や実態に応じて工夫していかなければならない。そこで各学校で活用されるであろう様々な学習活動を想定し、評価方法をまとめた。

(2) 授業による検証

本研究では、「追究活動の段階における学習形態・学習活動の工夫」、「追究活動の段階における効果的な評価の在り方」について検証授業を実施し、その効果を明らかにした。

3 研究の構想図



追究活動の段階における学習形態・学習活動の工夫

1 研究を進めるにあたって

中学校における総合的な学習の時間の課題の一つは、追究活動の段階において生徒の学習意欲をいかに高めていくかということである。なぜなら、総合的な学習の時間における追究活動の段階として、現状では以下のようなことが挙げられるからである。

- ・ 同じテーマの生徒と学習していくことがあるが、そのことによって主体的に学習に取り組めなくなる生徒もいる。
- ・ 体験学習は単に体験だけに終わってしまい、その後の学習に結び付けられないことがある。
- ・ 指導計画の中で各学習活動のつながりが弱いため、学習が深まらず、生徒の意欲が持続していかないことがある。

このような状況において、生徒の興味・関心を喚起し、意欲を高め、持続させながら学習活動を進めていくためには、追究活動の段階における多様な学習形態や変化に富んだ学習活動を工夫し、展開していくことが必要である。

このようなことから本分科会では、追究活動の段階における効果的な指導を明らかにするために研究を進めることとした。具体的には、次ページ(p 6 ・ p 7)の<表 1 >のように、追究活動の段階における各学習活動の長所、留意点をあげ、それが収集・処理・考察のどの段階で用いるのが効果的か、また、学習形態はどのようにしたらよいかを確認するためのものである。

なお、本研究では学習形態を以下のように分類した。

学習形態	長所	有効な活動場面
一斉	互いの学びを支えあったり、刺激しあったり、交流したりすることができる。	学習を進めていくにあたって全員が身に付けておきたいことがある場合
グループ	グループ全員で学習したり、役割を分担して学習したりして、互いに協力して、能動的・積極的に学習に取り組める。	生徒の社会性・人間関係に配慮する場合
		同じ興味・関心から構成する場合
		異年齢や男女別で構成する場合
個人	個々の興味・関心を生かすことができ、学習の広がりや深まりを個々のレベルで展開することができる。	同じ学習課題で一人一人学習に取り組む場合
		複数の学習課題から選択して学習に取り組む場合
		各自が学習課題を設定し、自分のペースで学習していく場合

また、<図 1 > (p 8) は、追究活動の段階における収集・処理・考察の各段階のかかわりを、そして<図 2 > (p 8) は、追究活動の段階における中間発表会の効果を確認するためのものである。また、<事例 > (p 8 ・ p 9) では、追究活動の段階における学習活動の組み合わせ方の具体例を示した。指導計画を作成する上で参考となるものである。

< 表 1 >

課題追究の段階における学習活動の種類

・・・最適 ・・・適

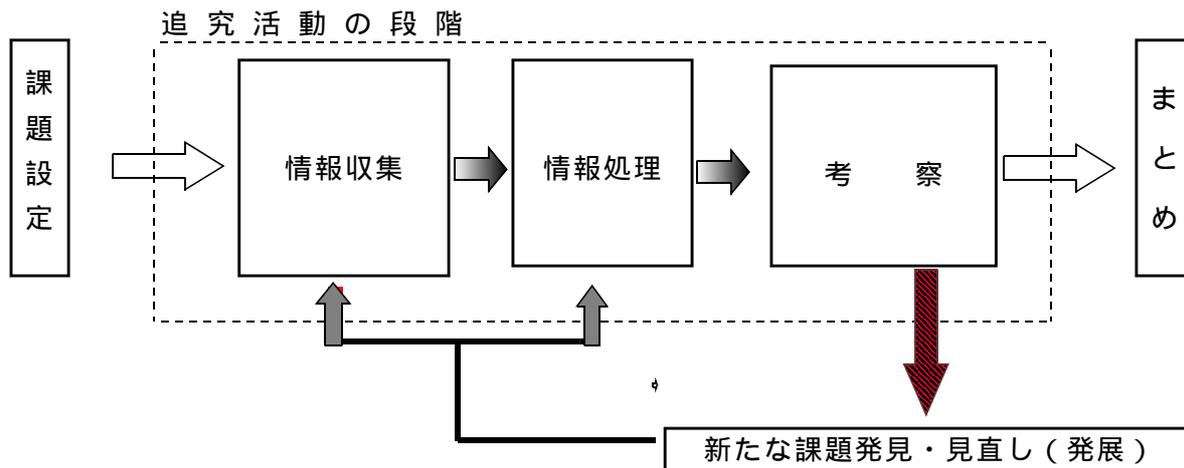
学習活動	追究活動段階			学習形態			長 所	留 意 点
	収集	処理	考察	一斉	グル - ブ	個人		
外部施設見学・取材活動 (図書館・美術館・博物館・科学館・動物園・植物園・公園など)							<ul style="list-style-type: none"> ・学校では解決できない課題解決のための情報を得ることができる。 ・展示物を動かしたり、触ったりして、楽しみながら学べる。 ・学芸員や司書など、専門的な知識を持った人に協力してもらえる。 ・学校と違った環境の中で、興味を持って学習に取り組める。 ・公共施設の使用等について道徳の時間と関連づけた指導ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・膨大な情報の中から必要とする情報を選択するために目的意識をはっきりさせておく必要がある。 ・公共施設のため、施設利用にあたって、事前に許可や打合せを十分にすることが必要である。 ・生徒に利用上のル - ルを徹底しておく必要がある。
体験学習 (社会体験・自然体験)							<ul style="list-style-type: none"> ・国際理解や福祉などのテ - マごとに体験の意義は異なるが、直接体験することにより、そこで習得した知識や技能を、課題解決に活用できる。 ・達成感や学ぶことの楽しさを体得することができる。 ・学校と違った環境の中で、興味を持って学習に取り組める。 ・社会体験学習は、特別活動と関連づけた指導ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験だけが孤立したものになりがちなので、体験学習を行う際のねらいをはっきりさせ、体験を振り返ったり、体験での気づきを学習に結び付けられるような指導計画が必要である。 ・諸機関(教育委員会・保健所など)への届け出が必要な場合もある。 ・事前に体験先と打合せを十分にすることが必要である。 ・生徒に体験させてもらうためのマナ - や利用上のル - ルを徹底しておく必要がある ・安全管理に十分配慮しなくてはならない。 ・交通費や材料費など体験に必要な費用の負担について明確にしておくことが必要である。
専門家への取材活動 (高齢者・地域の人・保護者、企業、NPO、公共施設関係者など)							<ul style="list-style-type: none"> ・教師以外の大人に出会う絶好の機会である。 ・専門的な知識や技能、豊富な経験を持った人に協力してもらえる。 ・生徒が新鮮な気持ちを持って意欲的に取り組める。 <p>学校の教育活動を支援してくれる人材を探し、紹介してくれる「コ - ディネ - タ - 」役の「地域教育サポ - ト・ネット」事業が進められている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校側が必要とする人材を見つけ出すことが難しい。 ・生徒に外部の人に対する言葉づかいやマナーなどを徹底しておく必要がある。 ・生徒に何を学ばせたいのかというねらいを、相手にはっきり伝えるなど、事前の打合せを十分にすることが必要である。 ・交通費など必要な費用の負担について明確にしておくことが必要である。

<p>インターネットを活用した調べ学習 (情報収集活動)</p>						<ul style="list-style-type: none"> ・効率よく情報収集ができる。 ・生徒は積極的に情報に関わろうとする意欲を持つようになる。 ・学校の中から世界中の情報をリアルタイムに収集できる。 ・電子メールなどを使用することによって、情報交換が以前に比べ格段に容易である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パソコン操作の学習を計画的にしておくことが必要である。 ・情報の信頼性が低いものもある。 ・膨大な情報の中から必要とする情報を選択し、それをまとめ、分析することが難しい。 ・学校の施設・設備に差がある。 ・著作権や肖像権などを確認しておく必要がある。 ・有害情報を収集しないように配慮をしなければならない。
<p>話し合い活動・ 討論等</p>						<ul style="list-style-type: none"> ・多様な意見を引き出すことができる。 ・様々な意見や異なる立場にたって相手を理解しようとする心ができる。 ・コミュニケーション能力の向上につながる。 ・客観的に物事を見る姿勢ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ構成に配慮する必要がある。 ・ディベートの場合、手法を事前に説明し、練習しておく必要がある。
<p>観察・調査</p>						<ul style="list-style-type: none"> ・自分の課題に基づいて、直接、事象を観察することができ、課題解決に活用できる。 ・学校と違った環境の中で、興味を持って学習に取り組める。 ・観察の場として、ビオトープを校内につくることが注目されてきている。 ・現場で生の情報得ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察するねらいをはっきりさせ、観察で得た情報をフィードバックできるような指導計画が必要である。 ・諸機関(教育委員会・保健所など)への届け出が必要な場合もある。 ・事前に観察先と打合せを十分に必要がある。 ・利用上のルールを徹底しておく必要がある ・安全管理に十分配慮しなくてはならない。 ・交通費や材料費等観察に必要な費用の負担について明確にしておくことが必要である。 ・情報量が多いので考察や整理を十分に行う必要がある。
<p>中間発表会</p>						<ul style="list-style-type: none"> ・学習の深化が図れる。 ・意見交流の場を通して、賞賛したり、励ましたり、アドバイスをして、生徒同士で磨きあうようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の進度によって発表内容に差ができる。 ・まとめのための時間が必要になる。
<p>パソコンを活用した表現・作業活動</p>						<ul style="list-style-type: none"> ・効率よく情報処理ができる。 ・生徒は積極的に情報に関わろうとする意欲を持つようになる。 ・LANの活用によって生徒が協力してできる。 ・画像や音声を組み合わせたプレゼンテーションをつくることできる 	<ul style="list-style-type: none"> ・パソコン操作の学習を計画的にしておくことが必要である。(技術科との連携) ・パソコン活用に関する教員の研修体制が必要である。 ・学校の施設・設備に差がある。

2 追究活動の段階における学習の流れ

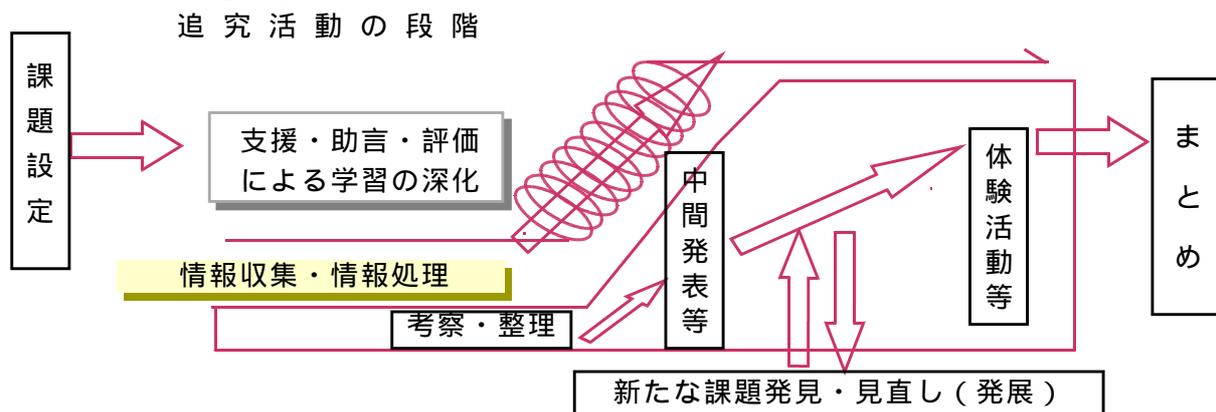
本研究では、追究活動の段階の情報収集・情報処理・考察の各段階の流れを図で表した。

< 図 1 > 基本タイプ



生徒は課題を設定した後、情報収集 情報処理 考察へと学習を深化させる。ただし、考察の段階で新たな課題発見や処理の見直しを得た生徒は、情報収集や情報処理の段階へとフィードバックする。また、多くの場合この一連のパターンを繰り返すことによって課題の解決へとつながる。

< 図 2 > 中間発表を行った場合



追究活動の段階で中間発表を入れることにより、情報の整理・考察が行われる。さらに発表において他者から支援・助言・評価（相互評価）を受けられ、学習の深化や興味・関心の持続が見られる。（図中のコイル状の部分は、中間発表等で支援・助言・評価をされることによって生徒に学習の深化が起きるところを表している。）

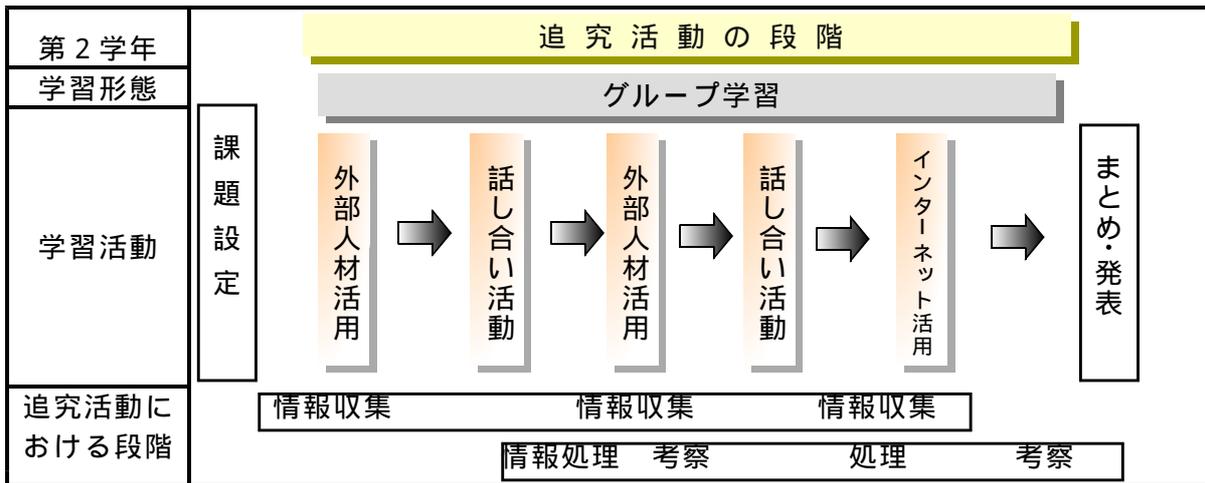
3 追究活動の段階における学習活動の組み合わせ方の具体例

本研究では、追究活動の段階における学習活動の組み合わせ方の具体例を図で表した。

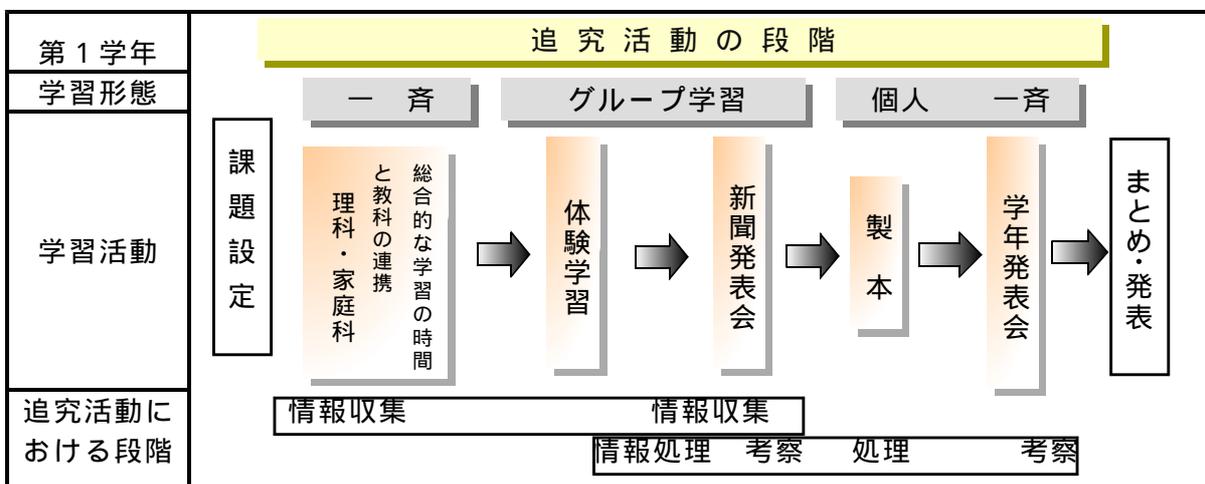
(1) テーマ「自己の生き方を学ぶ」

第1学年	追究活動の段階						
学習形態	グループ学習（ゼミ形式）			異学年	個人学習		
学習活動	課題設定	外部施設活用 インターネット活用	外部人材活用	中間発表会	観察・調査	体験学習	まとめ・発表
追究活動における段階		情報収集	情報収集	考察	処理	考察	

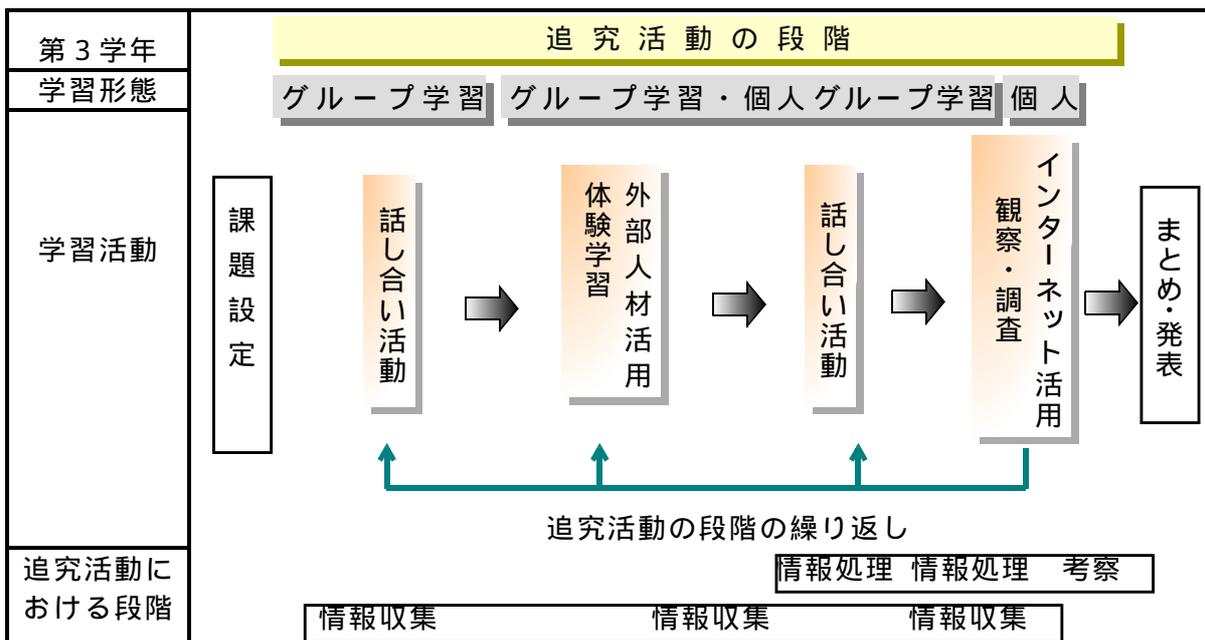
(2) テーマ「世界の中で生きる」



(3) テーマ「学び方を学ぶ」



(4) テーマ「将来とのふれあい」



追究活動の段階における効果的な評価の在り方

1 研究を進めるにあたって

B分科会では、追究の段階における効果的な評価の在り方として、本研究主題のもと、追究の段階でどのような評価を行えば、生徒が意欲的に学習活動に取り組めるようになるかについて研究を進めてきた。

このことに関連し、教育課程審議会の答申では、総合的な学習の時間の評価について次のように指摘している。「総合的な学習の時間の評価は、この時間の趣旨、ねらい等の特質が生かされるよう、教科のように試験の成績によって数値的に評価することはせず、活動や学習の過程、報告書や作品、発表や討論などに見られる学習の状況や成果などについて、生徒のよい点、学習に対する意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて適切に評価すること」とされている。

この評価の考え方は、今までの各教科や選択教科などの評価方法とは大きく違い、そこに至るまでの各段階における様々な評価が大切になる。そこで、この分科会では、まず、総合的な学習の時間における評価方法を次ページ（p 11）の〈表2〉のような一覧表に表し、その特性や効果をまとめてみた。

総合的な学習の時間においては、生徒自らが課題を見付け、課題を設定し、その課題の解決に向けて学習活動を展開していくことになる。このような学習活動において、生徒の学習意欲を維持するとともに、より一層高めていくためには、生徒一人一人の「自ら学ぶ意欲」が重要である。そこで、「自ら学ぶ意欲」を持続させるために、B分科会では様々な評価方法の中から、第一に自己評価力を高めることの必要性に注目した。追究段階における学習活動を展開する中で、生徒自らが設定した課題や学習計画、追究の段階を振り返り、すべての学習段階・学習形態で自ら評価を行う自己評価は極めて重要である。

また、追究の段階における中間発表などにおいては、他者と比べるのではなく、生徒に自らのよさについて気付かせることも重要である。相互評価は他者と比べるのではなく、他者から自分のよさを指摘されることによって、自己認知ができ、自分で努力しようという意欲を喚起させる。それと同時に、教師から指摘されるよりも、生徒同士で改善点などを指摘させる方が、これからの学習活動に意欲的に取り組めることになる。このように生徒相互による評価は、自己評価がより確かなものとなり、評価力を高めることができると考えた。

そして、この自己評価と相互評価を踏まえ、それぞれの追究段階における指導方法や学習形態を工夫することによって、生徒一人一人の意欲がより一層高まるものと考えている。

しかしながら、自己評価も相互評価も生徒の主観によるものであり、客観的な根拠による評価ではないことから、その内容は個人によって様々である。生徒の立場からすれば「自分でつけた評価は正しいのだろうか」、「友だちの評価はいろいろあるけれど、どれが正しいのか」といった不安がつきまとうはずである。

先行研究によれば、自己評価や相互評価が学習意欲を高めるのではなく、その内容について教師が客観的な裏付けとなる指導をすることが生徒の学習意欲を高めるとも言われている。したがって、自己評価や相互評価を行うときにも、そのための評価規準が必要になり、規準に照らした的確で具体的な指導・助言が必要になることを常に考えておかなければならない。

<表2> 追究活動の評価方法一覧（指導と評価の一体化を目指して）

評価者	方法	特性	効果
教師による評価	観察	教師が気付いたことにすぐ対応できる。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒のつぶやきや表情などから、つまずきや悩みなどをくみ取り支援できる。 支援により意欲を喚起できる。
	補助簿	評価ポイントをはっきりさせることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 事前に定めた項目について、生徒一人一人の状況を判断できる。 記録をもとに必要な支援を行い、意欲的に取り組ませることができる。
	ワークシート	多くの生徒が同時に同じ内容についてとりくむことができる。	<ul style="list-style-type: none"> 教師は、生徒一人一人のワークシートを通して、生徒の学習状況を確認できる。 学習状況の確認をもとに必要な支援を行い、生徒の意欲をさらに向上させられる。
	ポートフォリオ	教師も生徒も必要に応じて今までの学習活動を振り返ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が自分の学習活動を振り返り、成果を確認し自信をもてる。 ファイルを確認することで、生徒一人一人の変容が確認できる。 長期的に見ると、より各生徒の良さや意欲、態度がはっきりととらえられる。 形成的評価にも総括的評価にも使用できる。
生徒による評価	自己評価	学習の振り返りをさせることにより、自分の成果や課題を考えさせることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 各自が「何をしたか、楽しかったか」「成功したか、なぜうまくいったか」「失敗したか、その原因は」「工夫したり努力したこと、つまずきをどのように克服したか、やりとげたこと」「新しい課題を見つけたか」などを通して自分の良さを知ることができる。 生徒に自分の良さを自覚させることにより意欲をさらに引き出すことができる。
	相互評価	互いの状況を振り返り教え合い、認め合うことができる。	<ul style="list-style-type: none"> 自分が気付いていないよさに気付き、自信を持って意欲的に取り組むことができる。 互いの学びが深まり意欲的に次の課題に取り組むことができる。 各自の評価が確かなものになり、自己評価力を高めることができる。
第三者の評価	外部評価	保護者や地域の人に学習活動を公開することができる。専門的な立場の方から指導を受けられる。	<ul style="list-style-type: none"> 保護者や地域の人感想にも期待を寄せ、さらに意欲的に取り組むことができる。 体験学習やゲストティーチャーによる指導の一つ一つに、生徒は興味・関心をもち意欲的に学習することができる。

2 自己評価

自己評価は、生徒が具体的な学習活動を通して探求したことや感じたこと、学んだことなどを振り返り、課題について今後も考えることができるように、活動全体を振り返ることができる評価方法である。

総合的な学習の時間の様々な学習形態(一斉・個人・グループ)・学習活動で評価を行い、これまでの学習活動の振り返りを通して、自分のよさを知り、自覚することによって意欲を高めることができる。

しかし、自己評価を行う上で、総合的な学習の時間において学ぶ生徒の誰もが、すぐに自ら学びの足跡を記しながら、それに基づいて課題に取り組むことができるというわけではない。そこで少なくとも自己評価活動として、自らの学びを振り返り、自らの学びの姿を見つめながら学習を進めるために、学年に応じて段階的な指導を行う必要がある。

そこで、本研究において、追究活動における自己評価として、2種類の自己評価カードを作成し、それに基づいて実践した。カードは毎時間の総合的な学習の時間の最後に、本日の課題に対しての自己評価を行い、振り返りとともに次回への課題を確認する。教師側はこの自己評価カードを見て、追究活動において、各生徒の学習の進度を確認するとともに、様々な支援をすることができる。また、教師によるカードの記述によって、生徒は学習意欲をさらに高めることができる。カードは追究活動における中間発表時の自己評価カードである。自分の学習してきたことを整理し、今後の学習へ向けての準備や目的、課題や流れを明確にすることができたかを評価項目に入れ、単に、中間発表会の自己評価に終わらせることがないようにした。

自己評価カード①

()年()組 番号() 氏名()

□	月	□	日	今日の課題は	
評価項目		評価			
1. 意欲的に取り組みましたが		A B C D			
2. 調べ方や解決の方法を工夫しましたが		A B C D			
3. 自分の力で考えることができましたが		A B C D			
4. 今日の課題を達成することができましたが		A B C D			
A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった 今日の取り組めた内容 今日の反省と次回の課題					
先生より					

自己評価カード②(中間発表)

組 番 名 前

	評価項目 (下段に理由を記入する)	評価
1	十分に準備をして、中間発表会に臨みましたか。	A
理由		B
		C
		D
2	中間発表会で自分の役割をしっかりと果たすことができましたか。	A
理由		B
		C
		D
3	他のグループの発表を聞き、今まで知らなかったことを学んだり、新しい疑問を持つことができましたか。	A
理由		B
		C
		D
4	中間発表会やアドバイスカードを通して、自分の課題を見つめ直すことができましたか。	A
理由		B
		C
		D

3 相互評価

相互評価は総合的な学習の時間の学習活動の中で、グループ活動や中間発表・本発表の時などに適している評価方法である。

これは、生徒同士が行うものである。生徒は、互いの取り組みについて、状況を振り返ることによって、互いのよさを認めたり自分のよさに気付くことになる。それが、自分にとって自信となり、今後の追究活動において学習活動が高まっていくのである。また、教師が指摘するのではなく、生徒が互いに指摘し合うことで互いの学習活動が深まり、次の課題への取り組みが意欲的になってくる。それと同時に、自己評価力も高めることができる。

しかし、互いのよさを指摘するだけではなく、改善点なども指摘することによって、これからの学習活動をする上で、さらに意欲的に取り組めることになる。

そこで、本研究において、追究活動における相互評価として、手段の一つであるアドバイスカードを作成し実践した。評価カードを記入させる場合は、事前に記入の仕方の説明をきちんと行い、十分に時間を取る必要がある。下記のアドバイスカードは、追究活動における中間発表時に、生徒が実際に記入したものである。互いによかった点ばかりでなく、改善できたらいい点などをアドバイスすることによって、自分では気付かなかったよさを知ることができる。記入後は各自に戻し、グループで話し合って次への取り組みに生かしていくことになる。

アドバイスカード

班	氏名	良かった点	改善できたらいい点 (体験学習へ向けての準備や 体験学習でやってること)	質問・感想・アドバイス
スポーツ屋さんへ	より	くつのもよが良くて良かった。図などで出して分かりやすかった。	くつたのナアアアアアア ポイントがユニホーム なアアアアアアアアア アアアアアアアアアア	自分の考えが よく考えてあって 良かった。

班	氏名	良かった点	改善できたらいい点 (体験学習へ向けての準備や 体験学習でやってること)	質問・感想・アドバイス
洋品店さんへ	より	体験学習先をやりた いことというのがしか り書かれておツツとて 良かった。	商品の流通などにつ いてもう少し詳しくし らべられたら良いと思 いました。	接客のしえなど 見てまほしいと思 いました。

V 実践事例

1 A中学校における「中間発表会を通して、生徒の意欲を高める指導の工夫」

(1) テーマ設定

学校テーマ「千住・荒川端から世界へ」

2学年テーマ「地域とかかわり自分の可能性を引き出そう」

(2) 第2学年の後期指導目標

本校では1年次にボランティア活動、2年次に職場体験学習、そして3年次は総合的な学習の時間で学んだことを10枚程度の論文にまとめることを通して、学校テーマである「千住・荒川端から世界へ」を実現するように3年計画で学習している。

2年生ということで去年1年間、課題設定から調査・追究活動、そしてまとめ・発表という一連の課題解決型学習に取り組んでいるので、ある程度の知識と技能が身に付いている。また後期のポイントでもある「職場体験学習」にも昨年参加しているため、自分で体験先を見付け、直接受け入れの可否を交渉して「職場体験学習」に参加するという「かかわる力」に関しても基礎的な能力は身に付いている。「表現する力」に関しても同様にポスターセッション方式の発表会を経験していて、基礎的な能力は身に付いている。

ただし、昨年度は1年生ということで、全てが初めての経験であったために不十分な面が見られたのも事実である。特に「職場体験学習」に関しては、調査活動や学習が不十分なまま参加して、自分の課題を解決するための有効な調査活動であるという認識が薄い生徒も見受けられた。したがって、2年生の後期はこれら昨年度の反省を生かして「職場体験学習」に参加させる必要がある。そのためにも「中間発表会」を行うことで調査や学習の進行度を確認し、自分の課題を明確にして「職場体験学習」に参加させたい。

またポスターセッション方式の発表会でも、昨年度の経験を生かし、より工夫された発表会となるように援助していく。特にポスターにこだわらずパワーポイントなどパソコンを使用した新しい形の発表も視野に入れて指導していく。また、2年生の特別活動として位置づけられている「進路学習」とも連携しながら、自分を見つめ直し、自分の適性から自分の未来や将来を考えることも指導の目標としている。

生徒が自らの生き方を考え、主体的に自分の進路を選択していくために、特に「職場体験学習」に関しては交渉の段階から実際の体験、そしてまとめの段階までを生徒が主体的に考え判断して、正しく行動していけるよう指導していく。また「職業調べ」は1年次に行っているが、今回は自分の希望する「職場」を体験することができるので、より「職業」に対する意識を高めるとともに自己理解を深めることで、よりよい進路計画の作成に役立てるようになる。

以上のことから、次の4つの能力や態度を育成することを目標とした。

生徒が社会の変化に主体的に対応し、自らの生き方を考える。

自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、よりよく問題を解決していく。

将来に対する目的意識を持って主体的に自己の進路を選択し決定していく。

学び方やものの考え方を身につけ、生涯にわたる自己実現を図っていく。

(3) 第2学年の後期指導計画(全50時間)

		学習内容 ()は時数	学習活動	学習支援	評価
後 期	7月	課題設定 後期ガイダンス (1) 個人の課題検討決定(2) 体験希望先決定 (1) 体験依頼打ち合わせ(1) 学習計画表作成 (1) 希望先へ依頼 (1)	・学習の目的や方法を理解する。 ・学年テーマに基づき個人テーマ・体験学習希望先を決定する。 ・具体的な調査方法を確認して学習計画を立案する。	助言 話し合い 提示 交渉練習	自己評価 教師による評価 外部評価 (体験先)
	9月	課題追究 グループ分け (1) 正式依頼状持参 (1) 調査活動 (2) 校外調査活動 (2) 調査活動のまとめ (2)	・体験学習先に基づきグループ分けをする。 ・学習計画に基づいた校内・校外調査活動を行い、課題を追究する。	助言 グループ分け 校外施設活用 校内施設活用 話し合い	自己評価 教師による評価 外部評価
	10月	中間発表・体験学習 調査活動 (1) 体験先と打ち合わせ(1) 調査・準備活動 (2) 中間発表会(本時) (2) 体験学習1日目 (6) 体験学習2日目 (6) 体験学習のまとめ (1) お礼の手紙作成 (1)	・調査活動を継続・修正しながら体験学習への準備をする。中間発表会をすることで目的を明確にし、意欲を持って学習にあたる。 ・体験学習を行う。 ・体験学習のまとめをする。	アドバイスカード 交渉 話し合い 意見・感想 巡回 激励 提示	自己評価 相互評価 教師による評価 外部評価
	11月	まとめ お礼の手紙持参 (1) 調査 (2) まとめ (4)	・調査活動を継続・修正しながら課題を追究する。 ・発表に向けてまとめる。	助言 話し合い	自己評価 教師による評価
	12月	発表評価 発表準備 (4) 発表会 (2) 自己・相互評価 (2)	・ポスターセッションによる発表会を行う。自己・相互評価に合わせて第三者評価を行う。	アドバイスカード 意見・感想 激励	自己評価 相互評価 教師による評価 外部評価

(4) 本時のねらい

体験学習までに調査したことのまとめを中間発表することによって、自分の課題を再確認する。

発表会の役割を分担し、一人一人が責任を果たすことで、達成感をもつ。

相互に評価をしたり、意見を交換したりすることを通して、今後の学習活動への意欲を高める。

(5) 本時の展開

	学習内容 ()・学習活動 ()	教師 (T) ・ 生徒 (S)	評価の観点
展 開	1 中間発表会 生徒が司会進行を行う。 生徒がアドバイスカードの説明をする。 グループごとに発表をする。 発表を聞くグループはよかった点や改善したらよい点をアドバイスカードに記入する。	他のグループの発表を見て、自分の学習に生かせるように考えさせる。(S) 一人一役の徹底とよい点を誉め自信と意欲を持たせる。(T) 発表会のマナーを守る。(T,S)	・関心 ・意欲 ・態度 ・表現力 ・観察力
	2 振り返り よかった点・体験学習へ向けてをグループごとに発表する。 発表に対して質疑応答をする。	アドバイスカードを受けて、自分の学習を再確認する。(S) アドバイスカードを通して、内容を高める助言ができるようにする。(S)	・情報選択 ・情報活用 ・情報整理

ま と め	3 学習の再確認 グループごとにアドバイスカードを受けて学習の再確認をする。	課題を整理して、目的をもって体験学習に行けるようにする。 (T,S)	・課題発見 ・学習を見通す力
	4 まとめ ワークシートに記入する。 自己評価カードに記入する。	ワークシートと自己評価カードの記入方法を示す。 (T,S)	・自己評価力

(6) 成果と課題

中間発表会について

< 成果 >

- ・「去年よりもはっきりとした目的と意欲をもって体験学習へ参加できた」という生徒の意見から、中間発表会をするまでの過程と発表会で、生徒の意欲をさらに高めることができた。
- ・中間発表会をすることで、自分の課題を整理できた。
- ・自己評価カードに「自分の役割をしっかりと果たすことができた」という生徒の意見があり、役割分担をすることで、全員が発表の準備から積極的に授業に参加できた。
- ・模造紙に記述することで、体験学習で取り組みたいことが明確になった。
- ・「次回はこんな役をやりたい」という生徒の意見から、自分たちで発表会を運営しようという意欲が高まった。
- ・以前よりも原稿や模造紙に頼らず、自分の言葉でしっかりと発表できるようになった。



< 課題 >

- ・司会やカードの説明など発表会の中の役割と自分の発表を両立させるのは難しい生徒もいるので、教師が発表会の運営に携わった方がよい。
- ・模造紙を事前に貼っておいたり、貼った物を持っていくなどして、発表会が円滑に進むように時間を確保する必要がある。そしてアドバイスカードを基にした話し合いに多く時間を取る必要がある。
- ・学習活動に応じて、教室内の机の形状や配置を工夫する必要がある。

アドバイスカードについて

< 成果 >

- ・アドバイスカードを工夫したので、「流通の仕組みがよく分かった」「患者さんとのコミュニケーションについて実際に調査してきたらよい」など、生徒たちも他のグループの内容に迫るアドバイスができた。
- ・アドバイスカードを交換することによって、「商品の配列はこうした方がよいのでは」というような自分たちとは違った角度・視点からのアドバイスを受け入れ、話し合いを

活発に行うことができた。

- ・今後の体験学習や学習活動に向け、新たな意欲を引き出すことができた。
- ・教師の励ましや賞賛に対して、生徒が嬉しそうに頷いたり、躓いている生徒もまた努力し始めたりと、教師の支援も有効であることが分かった。



< 課題 >

- ・改善を促すこともアドバイスの一つだということを生徒に十分に理解させる必要がある。
- ・アドバイスを受け入れられない生徒には、自分を見つめ直すきっかけを与え、自分を過小評価してしまう生徒には、自信を無くさないような教師の支援が必要である。

自己評価カードについて

< 成果 > カードへの記入

- ・毎回の自己評価を行ってきたので、短時間でも自分の良かった点を中心に適切な自己評価をすることができた。
- ・教師は生徒の自己評価を、今後の学習への助言に生かすことができた。

< 課題 >

- ・自己評価の項目は、的確で分かりやすい表現にする必要がある。

(7) まとめ

実践授業を検討するにあたり、表1にある「課題追究の段階における学習活動の種類」からグループ学習を取り入れた。そうすることで中間発表会までの学習の過程で役割を分担して学習したり、互いに協力して能動的・積極的に学習を進めたりすることができた。また中間発表会でも自分の役割を確実に果たせたことで、達成感を得ることもできた。さらに図2にある「中間発表会を行った場合の追究活動の段階」についても、「去年よりもはっきりとした目的意識と意欲をもって参加することができた」という生徒の意見から、中間発表会と体験学習という学習活動の組み合わせは効果があったことが分かる。またアドバイスカードを用いて相互評価をしたり、自己評価をすることで客観的に自分の発表を振り返ることができたり、他の意見を取り入れることでその後の話し合いが活発になり、より深い学習となったりした。さらに教師がそれらの評価を生かすように生徒に支援や評価をすることで、生徒はより意欲を持ってその後の学習に取り組めることが、その後の生徒たちの学習への取り組みから分かった。つまり課題追究の段階で学習形態や学習活動を工夫するとともに、学習意欲を引き出せるような評価を行えば、生徒一人一人が主体的にいきいきと学習に取り組めるということが分かった。

2 B中学校における情報の選択・活用・整理の学習活動を通して生徒一人一人の学習意欲を高める指導の工夫

(1) テーマ設定

学校テーマ「共に生きる」

学年領域「第1学年：健康と生活」「第2学年：環境と生命」「第3学年：文化と国際理解」

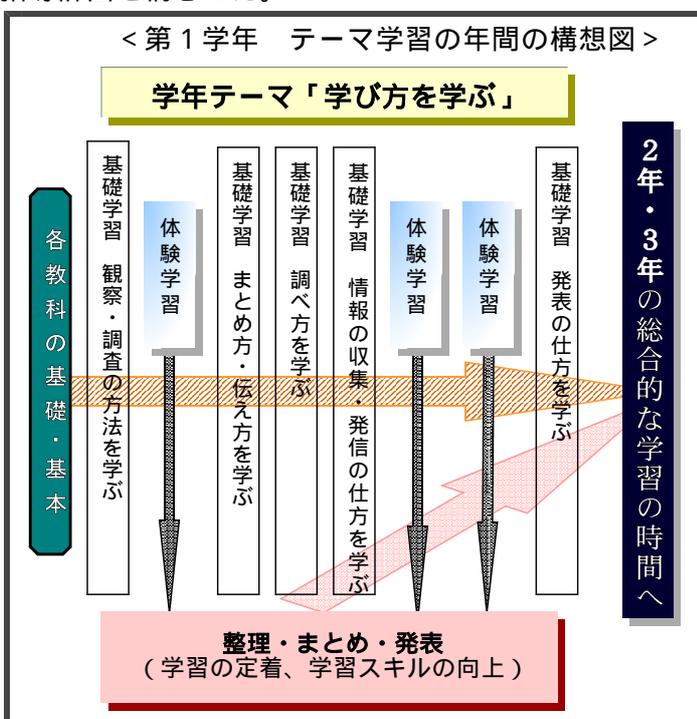
学年テーマ「学び方を学ぶ」

(2) 第1学年の指導目標と評価

本校では、「共に生きる」を学校テーマとして、領域を学年毎に定めている。また、学年では学年領域を踏まえた上で学年テーマを設け、第1学年では、「学び方を学ぶ」とした。この「学び方を学ぶ」は、第1学年テーマ学習の構想図にあるように、各教科の基礎・基本の学力の上に総合的な学習の時間に必要な基礎的な力を身につけさせ、第3学年の卒論発表会を目標に、その基礎的な力をしっかりと発揮させるために、3つの体験学習と5つの基礎学習を絡ませて年間の指導計画を構想した。

基礎学習は、これから3年間かけて行う総合的な学習の時間の学習スキルの向上を目指している。また、体験学習を間に入れることで基礎学習の成果を体験学習で生かし、学習の定着を確かめ振り返り、着実にその力を身につけさせる。ここで言うその力とは主に「かかわる力」や「表現する力」であり、総合的な学習の時間の目指す[生きる力]の要素となる。

評価は、学習毎に自己評価を行い、生徒に学習を振り返らせ、自己の努力や自身の変容を自覚させる。また、教師はその自己評価を



分析し支援や助言の材料とすることができる。生徒は、この学習毎の自己評価によって自己評価力が向上する。この力は、生徒が問題を解決する際に主体的に活動するための力となる。さらにここに相互評価や外部からの評価を取り入れることで、より客観的に自分を見つめられ、自己を振り返り、新たな発見や見直しが生まれ学習が深化していく。そしてこの繰り返しの中で養われる「自己を見つめる力」が「かかわる力」や「表現する力」と共に総合的な学習の時間の目指す[生きる力]の要素となる。

このようにして毎回の学習でとられる評価や生徒が作った資料は、教師からの評価とともにA4版のクリアファイルにまとめポートフォリオ評価として活用する。

(3) 第1学年 テーマ学習の年間指導計画(70時間扱い)

学期	時数	STEP	学習内容 <学習形態> (連携教科等)	評価・備考
一学期	4	問題提起	オリエンテーション	自己評価
	6	ゲストティーチャー	第3回全校講演会「共に生きる」	・講師2名
		基礎学習	・校庭のタンポポ(理科)、エコクッキング(技術・家庭科)	・教科との連携
	8	<u>体験学習</u>	武蔵嵐山体験学習 <グループ>	自己評価
8	基礎学習	新聞づくり・まとめ方を学ぶ <グループ>	グループ内評価	
	2	問題提起	クラス発表会・伝え方を学ぶ <グループ>	自己評価
			職業とは何か? 「生活を支える職業」(特活)	教師からの評価
夏季休業		情報収集 考察	・身近な職業調べレポート(特活・進路)<個人>	・A4レポート
二学期	8	基礎学習	調べ方を学ぶ(特別活動・進路・国語科)	・A3画用紙
			・約束の取り方、取材の仕方、お礼や感謝等	自己評価
	8	基礎学習	インターネットの使い方・情報機器リテラシー等	自己評価
		(本時)	職業調べ(技術・家庭科)<一斉・グループ・個人>	相互評価
		8	冊子づくり <グループ・個人>	・A4両面印刷
	8	中間発表会 <グループ>	外部評価	
		<u>体験学習</u>	職場訪問 <グループ・個人>	教師からの評価
	4	まとめ	お礼状、報告書づくり <個人>	自己評価
		アンケート	雪国の生活について <個人>	教師からの評価
		課題設定	グループ分け・ゼミに分かれる<グループ>	・質問のまとめ
冬季休業		情報収集 考察	雪国の生活について調べる <個人>	・A4レポート
			レポートづくり	・ワープロ可
三学期	6	班編成	課題別グループ作り <一斉>	
		中間発表会	レポートの発表 <個人>	自己評価
	4	<u>体験学習</u>	「猪苗代スキー教室」 <グループ>	相互評価
		ゲストティーチャー	「雪国の生活」についての講演	教師からの評価
	6	基礎学習	発表に向けて・・・話の伝え方を学ぶ	自己評価
	発表会	雪国の生活～体験発表～ <グループ>	相互評価	
	6	1年間のまとめ	1年間の振り返る <個人>	外部評価
		アンケート	第2学年「環境と生命」について	自己評価
春季休業		新たな 課題設定	・環境とは何か、生命とは何か(理科・道徳)	2年生への
			<グループ・個人>	ステップアップ

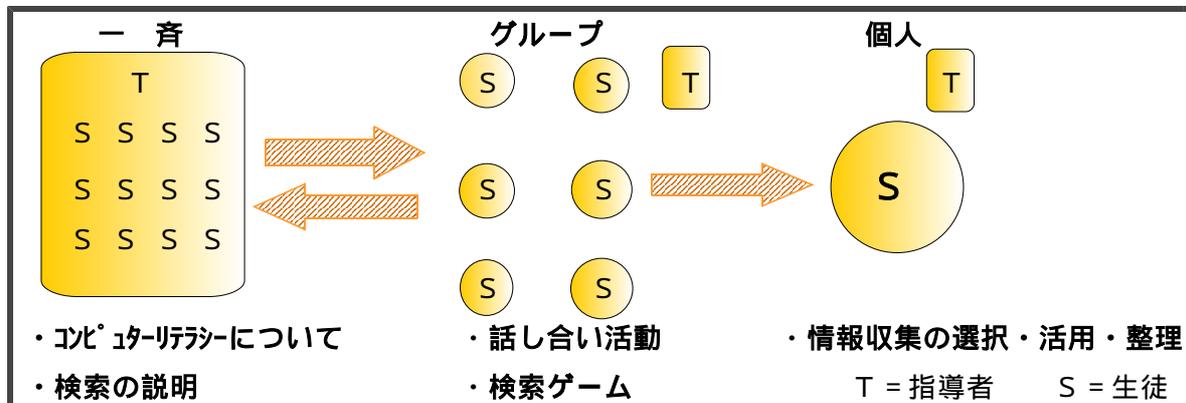
特活・・・特別活動、進路・・・進路学習

(4) 本時の内容

パソコンを使った学習は生徒に人気が高く、特にインターネットや電子メールは、自宅で行っている生徒が増えたせいか、興味をもって学習する。しかし、ただ興味があるだけで有効に使う事を知らないまま遊んでいる生徒も多い。また、コンピュータリテラシーについて知識が全くなく著作権を無視した行為を分からずに行ったり、迷惑メールや有害情報にのめり込む生徒もいる。そのような中、基礎学習の中できちんとしたインターネット

の使い方を学ばせ、ねらいにあるように「情報を適切に活用する能力を養う」ため3時間の学習の時間を設けた。さらにここでは、生徒の関心・意欲を持続しつつさらに次への課題へと学習意欲の向上があるように、学習形態や学習活動の配列を工夫した。また、自己評価と相互評価を効果的に用いることによってさらに学習のスキルが向上するようにした。

< 本時の学習形態や学習活動の流れ >



例えば一斉授業でコンピュータリテラシーについて学習した後、生徒たちはグループを組み話し合い活動に移る。こうすることによって一斉授業の中で個人で学習し自分の考えに埋没するだけでなく、他の生徒がどのような意見を持っているのかがわかり、他の生徒の影響を受け同意したり反論したりする。その中で自分の中に新しい考えや発想が発現しやすくなる。また、一斉授業では、全員が発言することはあまり多くはないが、生徒をグループにし少人数化することで、個人の意見の出る回数が増え、必然的に学習内容に関わる機会が多くなり関心・意欲が向上する。

次に以前本校で生徒に興味・関心のある授業のアンケートをとった際、1位がおもしろい話題を交えた授業で2位がゲーム感覚の授業であった。そこでインターネットの検索方法を説明した後、生徒の興味・関心の高いゲーム感覚の検索ゲームを考案し実践した。

右は検索ゲームの例であるが、生徒は、このような問題を15分以内にインターネットで検

< 検索ゲームの例 >

1. 次の問題をインターネットを使って解きなさい。
 - ア 早口言葉の東京都特許許可局とは何ですか？
 - イ 世界で一番ダイヤモンドの産出される国はどこですか？
 - ウ 地球の中心から考えて世界一高い山はどこですか？

索し正確に説明しなければならない。1番のアの問題は、実際には存在しない名前を検索しなければならない、容易には正解にはならないようになっている。また、イの問題は、ダイヤモンドで検索しただけでは、貴金属店の名称がずらりと並ぶだけであって、産出国は出てこない。また、ウの問題は、いくつかのホームページを見て回りながら、必要な情報だけを集め計算し解答しなければならない。実際に検索をすることがインターネット学習で一番難しく、集中力のない生徒は、いつしか関係のないホームページで遊んでしまう。しかし、この検索ゲームでは、検索の難しさと検索ができたときの喜びを味わうことができ、その後の検索作業を楽にしてくれる。

最後に検索ゲームで培った力を実際に自分の課題解決に生かす作業である。何をどのよ

うに検索し収集すれば、自分の課題を解決するための資料になるのかをよく考えながら、生徒は、次々に検索していった。

(5) 本時のねらい

これまで作成してきた職業調べのレポートを振り返り、自分の課題を再確認する。
情報を適切に活用する基礎的な能力を養う。

討議や評価をすることによって、自己を認識し互いに理解し合い、学習を振り返り、今後の学習意欲を高める。

(6) 本時の展開

(70時間扱い29, 30, 31時間目)

	学習内容・学習活動	学習支援・〈学習形態〉・場所	評価の観点
導入	1 本時のねらい、学習内容の理解 これまでにまとめた職業調べのレポートをよりよくするためには、どのようにしたらよいのか考える。 本時の学習内容と流れの確認を行う。	1 〈一斉〉 教室 これまで作成してきた職業調べのレポートをよりよいものにするために内容の振り返りをさせる。 本時の学習内容や流れが理解できているかを確認する。	関心・意欲・態度
展 29 時	2 コンピュータリテラシーについて学ぶ プリント資料やワークシートを用いてコンピュータリテラシーについて考える。 ワークシートに必要な事項を記入して整理する。 班に分かれて討議する。 (話し合い活動) 自己評価カードに記入する。	2 〈一斉・グループ〉 教室 プリントやワークシートを配布する。 コンピュータリテラシーについての内容を詳しく説明する。 グループに分かれさせる。 コンピュータリテラシーについて身近な問題をあげさせて班毎に討議させる。 理解不足の生徒に助言する。	知識・理解 思考・判断 自己評価力
開	3 インターネットの利用法を学ぶ 検索方法について手順を学ぶ。 必要な資料を選択する。 印刷の手順を学ぶ。	3 〈個人〉 パソコン室 実際にパソコンを使用して検索の手順を学ばせる。 印刷の前に必要な資料の選択をさせる。	知識・理解 思考・判断
30 時	4 「検索ゲーム」大会を行う 課題に従って検索を行う。 グループ内で検索の早さや内容の正確さを競い合う。(制限時間15分) 自己評価カードに記入する。	4 〈グループ〉 パソコン室 4名のグループを作らせる。 プリントの配布をする。 操作が不十分な生徒の支援をする。	関心・意欲・態度 コミュニケーション力 自己評価力
	5 情報収集 自分の課題の職業についての情報収集を行う。	5 〈個人〉 パソコン室 これまでの学習を生かして情報収集を行わせる。 A4のレポートにまとめさせる。	情報選択 情報活用 情報整理 思考・判断 技能・表現
ま と め 31 時	6 情報の収集状況の確認をする まとめた情報を班内で見比べる。 相互評価カードに記入する。 自己評価カードに記入する。	6 教室 相互評価の仕方を説明する。 〈グループ〉 〈個人〉 次回の予告をする。	相互評価力 自己評価力

(7) 成果と課題

< 成果 >

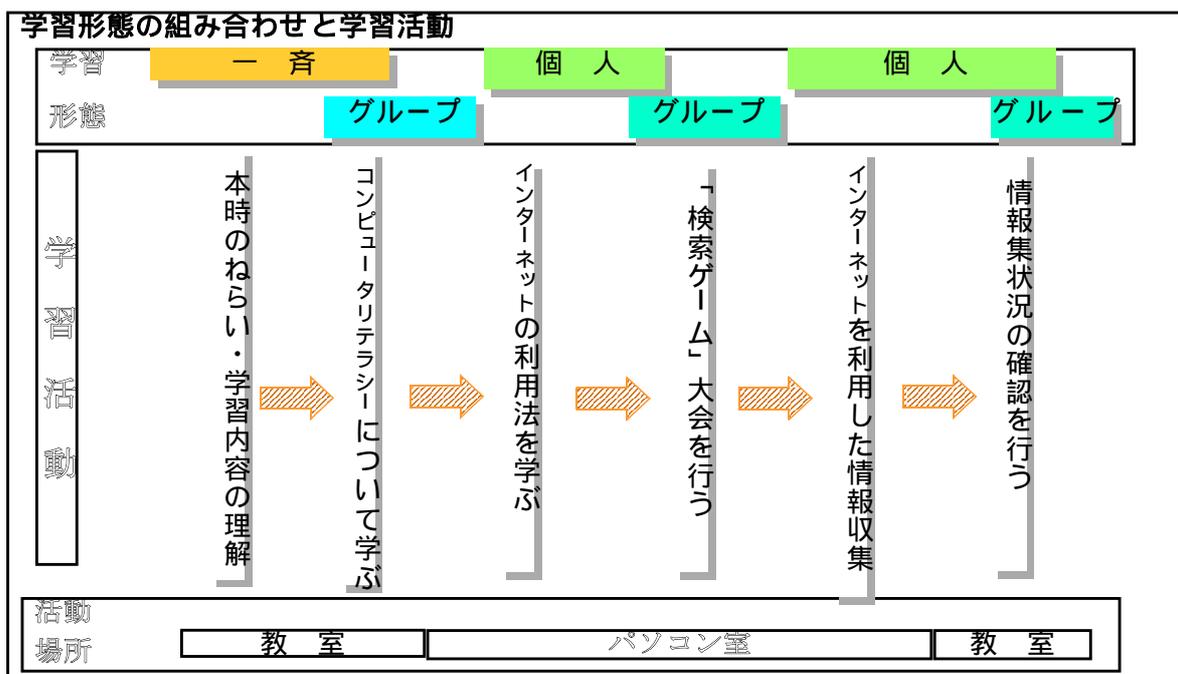
- ・ 学習形態や学習活動の配列の組み合わせをうことによって、これまで学習に集中できなかった生徒も関心と意欲を持って取り組むことができた。
- ・ これまで作成してきた職業調べのレポートについて、インターネットにより詳しい資料を収集することができたので、さらに改善することができた。
- ・ パソコンやインターネットの使用に関する学習スキルの向上が見られ、以前よりも正確に早く検索ができるようになった。
- ・ 自己評価を用いることで現在の自分の学習状況が把握できるようになった。
- ・ 話し合い活動や相互評価を用いることで協調性や互いの理解が生まれた。また、その結果、自己の内部に振り返りや新たな課題の発見が生じ、次の課題への意欲が高まった。

< 課題 >

- ・ 学習形態を変える際に集中がとぎれてしまうことがあった。指導者の適切な指示が必要である。
- ・ 検索ゲームを行った際に学習能力の差から最初からゲームをあきらめる生徒がいた。グループの構成を変えるなどの対処が必要である。
- ・ 相互評価で互いの良いところを見付け出すことを強調した結果、生徒から「ここはこうした方がよい。」等の指摘に関する内容がでにくかった。

(8) まとめ

本時の学習は、技術・家庭科との連携の下に情報の選択・活用・整理の学習活動を通して学習形態の組み合わせを工夫することで生徒一人一人の学習意欲を高めることができた。学習形態の組み合わせは、学習内容に合わせ生徒が活発に活動できるように工夫した。



成果と課題

本研究は、総合的な学習の時間の追究活動の段階を、学習形態・学習活動と評価の両面から研究を進めてきた。学習形態・学習活動の効果的な組み合わせ方と各学習活動における効果的な評価の方法について考え、授業を通して検証した。その結果、次のような成果と課題に至った。

1 成果

(1) 追究活動の段階における学習形態・学習活動の工夫

- ・ 追究活動の段階における学習活動を取り上げ、それぞれの長所、留意点をまとめることにより、課題追究の中の3段階(収集・処理・考察)のどの段階で用いるのが適切か、分類することができた。
- ・ 追究活動の段階における学習活動の一覧表や学習活動の組み合わせ方の具体例をあげることにより、どの段階でどのような活動が効果的であるか示され、適切な単元計画を作成することができた。
- ・ 追究活動の段階において、中間発表会を行うことで、生徒の興味・関心をより高め、その後の学習活動に向けての新たな意欲を引き出すことができた。
- ・ 一斉学習だけでは、生徒一人一人が活動する場面は少なくなるが、グル - プ学習や個人学習を組み合わせることにより、生徒が学習内容に関わる機会を増やすことができた。

(2) 追究活動の段階における効果的な評価の在り方

- ・ 自己評価を用いることによって、生徒は、自己理解を深め、自分の新たなよさに気づき、自信を持って課題に取り組むようになった。
- ・ 毎回自己評価を行うことによって、生徒は、その授業での達成度や次への課題を見つけることができた。また、教師は、その自己評価を生かし、生徒に適切な支援をすることができた。
- ・ 相互評価を用いることで、互いに教えあい、認め合うことにより、学びが深まり、意欲的に次の課題に取り組むことができた。
- ・ 相互評価や教師の支援により、各自の評価が確かなものになった。
- ・ 自己評価とともに相互評価を用いることは、自己理解を助け、自分自身が気付いていないよさを知ることができた。
- ・ 中間発表会において、相互評価を行うことによって、自分のよさや改善点に気づき、その後の学習に対する意欲を高めることができた。

2 課題

(1) 追究活動の段階における学習形態・学習活動の工夫

- ・指導計画を作成する際に、とりわけ、課題追究の段階における学習形態・学習活動を組み合わせた綿密な計画を立てる必要がある。
- ・1種類のみという単調な学習形態や学習活動に終始するのではなく、内容や生徒の状況によって、様々な学習形態・学習活動を使い分けることが必要である。
- ・教師は、学習形態・学習活動の知識を深め、その特性や性質を知る必要がある。
- ・学習形態の工夫をする際、教員の人数や教室の数には限りがあるので、それを前提に考慮する必要がある。

(2) 追究活動の段階における効果的な評価の在り方

- ・教師は、一人一人に応じた適切な指導や助言を行う工夫をする必要がある。
- ・自己評価力を高めるには、総合的な学習の時間だけでなく、教科学習においても、自己評価を積極的に取り入れていくことが必要である。
- ・毎回の評価を積み重ねていくポートフォリオは大変有効であるが、それをどう活用していくかについては、今後検討が必要である。
- ・自己評価カード、相互評価カードへの記入については、事前に教師が説明をきちんと行い、それを記入する時間を十分に取る必要がある。
- ・相互評価においては、互いのよさを認め合うだけでなく、改善点をあげることも、アドバイスのひとつであるということを、生徒に理解させる必要がある。
- ・毎時間の目標に応じた評価項目、評価規準を明確にする必要がある。

総合的な学習の時間には、教科の指導に比べ、実践的な事例は少なく、各学校とも、教師は模索しながらも、指導計画を立て実践している状況にある。しかし、中教審の答申では、目標や内容が明確でなく検証や評価が不十分であると指摘されている。保護者や地域には、学校が総合的な学習の時間に何をやっているのか、また、総合的な学習の時間で生徒にどんな力が育ってきているのか、理解されていないこともある。

総合的な学習の時間を充実させ、成果をあげていくためには、学校のカリキュラム開発力の向上が必要である。すなわち、学校全体において、総合的な学習の時間の意義をしっかりと共通理解した上で、生徒にはぐくみたい力を明確化し、そのための指導計画や指導内容を綿密に作成して、改善を図りながら、組織的に取り組んでいくことが重要な課題ということである。そこで、今後、教師自らの研修も必要であるが、学校間で、総合的な学習の時間の指導内容、指導方法、評価について、情報交換できる機会を持てるようにしていきたいと考える。また、学校の教育活動を支援してくれる事業が進められている地域もあるが、外部の支援を積極的に活用していくことができるようにすることも必要である。

平成15年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成15年度 第31号

平成16年1月21日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒1-1-14
電話番号 03-5434-1974

印刷会社名 勝田印刷株式会社